

The Concept of “Queer” in Social Space: An Analysis Based on Activities in a Community Center

By Takashi Yoshinaka

Abstract: This paper looks at the concept, meaning, and significance of “queer”, especially in the social activities/movements of sexual minorities in Japan. There exists the image that the concept of “queer”, with its aims of interrogation and destabilization, seeks to criticize or restrain the “movement” which makes use of identity politics and (strategic) essentialism for its development. Nevertheless, while movements based on identity continue to exist, it also can be said that “queer” as a concept differs from the universalizing as well as strategically essentialist theories that Gayatri Spivak describes, and rather seeks to privilege the (de)construction of socially recognized essentialisms.

Through analyzing activities in a community center, it can be thought that the cause of the dichotomy above is the prevalence of the concept of *toujisha* (“the people concerned”—in this case, the sexual minorities themselves). Although easy to understand, the narratives of *toujisha* can also be criticized from the point of view of anti-assimilation, as well as remain hidden in a society dominated by non-*toujisha*. However, the continuity and inconsistencies that exist between the positions of non-*toujisha* and *toujisha*, as well as the non-continuity between *toujisha* and identity politics can also be observed when the *toujisha* relate their sexual stories to non-*toujisha*. The concept of *toujisha* has no ostensible concern with identity politics, yet the telling of stories conducted by the *toujisha* also seems to consolidate the *toujisha* as a category. Storytelling as such exposes the inherent inconsistencies that exist between *toujisha*, non-*toujisha* and identity politics, and thus has the potential to act as a “queer” space.

Keywords: queer, LGBT, sexual minorities, sexuality, identity politics, strategic essentialism, community center

社会活動の中での「クィア」とは—コミュニティセンターの分析から—

吉仲崇（横浜市立大学大学院博士後期課程）

【要旨】本稿では、「クィア」という概念、とりわけ日本のセクシュアル・マイノリティの社会活動/運動の中での「クィア」の意義/意味を探る。日本でのセクシュアル・マイノリティをめぐるはたらきかけは、アイデンティティ・ポリティクスで（戦略的）本質主義として展開する「運動」に対し、脱中心化的な「クィア」が批判、もしくは牽制する役割を担ってきた、と端的にイメージされていたと思われる。しかし特定のアイデンティティに依拠する「運動」の側面ははまだ存在しており、また実は、「クィア」な概念は普遍的な理論というより抵抗言説の産物と捉えられるため、「クィア」概念が「運動」の中心化批判を行なっているという指摘は的外している。

ではこのような二項対立がなぜ生じるのか、1つのコミュニティセンターの活動から分析を行なった。それは「当事者」の有効性が影響していると推測されるからである。「非当事者」中心社会で「当事者」が可視化するためには、「当事者」による語りが必要だと思われてきた。この「当事者」の語りはわかりやすい一方、脱中心化の視点からは批判を受けるだろう。しかしながら、「当事者」が「非当事者」に語ったとき、「当事者」「非当事者」が限りなく連続しているという矛盾や「当事者」とアイデンティティ・ポリティクスの不連続性が浮かび上がる。それは、「当事者」によって中心化されるように見えながらその矛盾も露呈させる「クィア」な場として機能している可能性があることがわかる。

【キーワード】クィア、LGBT、セクシュアル・マイノリティ、セクシュアリティ、アイデンティティ・ポリティクス、戦略的本質主義、コミュニティセンター

1. 「クィア」の日本での使用

日本において「クィア」ということばが活字で、もしくはアカデミックな場で使われるようになってからすでにいくばくか経っていると思われるが、その使用範囲が「一般的」ではないという指摘は頻繁に散見される。たとえば、マーク・マクレランドは「ここ数年『クィア』(queer)はいくらか流通するようになってきたが、『この世界』のよりアカデミックもしくは常連アクティヴィストの中で主に使われているもので、その外側の人たちにはあまり理解されていない(McLelland 2005, 1)」と指摘する。また飯野由里子は、「クィア」の流通について「『クィア』は、異性愛以外のセクシュアル・アイデンティティーズ、すなわちレズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー (LGBT) などを表す別の(だが、なんとなく新しい)アイデンティティ・カテゴリーとして、より一般的に用いられつつあるようだ。そこでは、『クィア』がLGBTや『セクシュアル・マイノリティ』とほぼ同等の用語として、あるいはそれらと交換可能な用語として用いられている」(飯野 2007, 79)と指摘している¹。

この、「なんとなく新しい」という表現は、英語が起源であること、それにより「これまで日本社会で生きてきたゲイであるわたしは、当然のことながら『クィア』という言葉で差別を受けた経験がない」(河口 2003, iii)といった差別語としての歴史性を持っていないということにも由来するだろう。日本で「クィア」が使われるとき、飯野が指摘するような事象が起こっても不思議なことではない。

しかしながら、単なる新しさを表すためのファッション・タームであるとも言いきれない。また、常にいわゆる「アイデンティティ・カテゴリー」や行為等の「新しい」ことばの量産は、政治性と無関係ではなかった。

とくに運動の文脈などでは、「政治的コレクトネス」の要請によって各セクシュアリティの頭文字をとって印刷物や演説ではひとつの「決まり文句」としてLGBTと列挙されることも多くなった。そうした「細分化」されたカテゴリーを「集約」する便利な言葉として「クィア」という用語が流通したのである。こうした「集約」する方向性とは異なり、学問の中で「クィア」という言葉が使われるようになったときには、細分化された数々のセクシュアリティのあいだの差異、あるいは各セクシュアリティをめぐって交錯する多様な

¹ 本来、英語の“queer”および日本語に「翻訳」されたといわれている「クィア」には、政治的な意味や歴史が付与されている。それについては、2節でその流れを説明している。しかしこれは日本語としての「クィア」以降であり、「翻訳」される際に消えた意図や歴史が考察されていないが、その問題は別稿に譲る。

差異を浮かび上がらせ、差異そのものについて思考を深化させるための概念として提唱されたのである。(河口 同, iii-iv)

さらに前者の意味で「クィア」が使われる理由として、おそらくLGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）から漏れる存在（アセクシュアル、インターセクシュアル、Xジェンダー等）やカテゴリーが定まっていないクエッシングなどの存在を浮き彫りにさせる意図があると思われる。しかし、日本ではセクシュアル・マイノリティということばのほうが説明に要する時間が少ないということもあり、このことばのほうが「運動の文脈」ではよく用いられている。たとえば日本語の公的な資料の中に「セクシュアル・マイノリティ」や「性的マイノリティ（少数者）」はあっても「クィア」と書かれたものはほぼ見当たらないことも端的に示しているだろう。

日本では、この「集約」と「差異の思考」の2つが対立軸のように語られ、それは衝突する事象のように描かれてきた。そして、「運動の文脈」が前者、アカデミックな思考が後者と認識され、それがお互いを批判、もしくは牽制する役割を担ってきたと端的にイメージされる可能性がある。わたしも当初は「集約」しやすい「運動の文脈」と「差異の思考」にどのような連帯の可能性がある（べき）か考察しようとしていた。これは、後に詳しく述べる「かながわレインボーセンターSHIP（以下、SHIP）」でのわたしのスタッフ活動から感じていたことである。SHIPが講演などの活動をするとき、セクシュアリティということばすら知らない人が対象になることも多いため、わかりやすさと可視化の目的のもと、活動の中でも「セクシュアル・マイノリティ」を集約的な意味で用いている。その意味では「運動の文脈」に位置するといって差し支えなく、「差異の思考」としての「クィア」と対立するだろう。しかし、この2つの問題軸を読み進めていくと、そもそもこの2つの対立軸自体が本当に存在しているのだろうかという疑問がわきあがる。その理由を述べる前に、先に「クィア」ということばとポリティクスがどのような認識を示しているのか明らかにする必要がある。それは、「クィア」というものがいまだ合意の得られたことばではなく、「クィア」の相対的な認識はおろか、個人が考えている「クィア」のイメージすら異なっている可能性が高いからである。もちろん、どの「クィア」が最上であるかなどと考えるべきではなく、ここではわたしがどのように「クィア」を認識しているかを表明することによって、「クィア」概念自体を相対化することを目的としている。

2. 「クィア」の概念

「クィア」とはなにかという疑問に対してなされてきた議論を読み解くと、「脱中心化」が1つのキーワードとして浮かび上がる。

はじめて「クィア」を「セオリー」にすることを試みたテレサ・デ・ラウレティスは「クィア・セオリー」をゲイとレズビアンのださまざまなセクシュアリティ・ジェンダーについて「便宜上作ったひとつの仮説、キー概念」であり「ひとつの安定したアイデンティティではありません」（ラウレティス 1998, 68）と語っている。飯野はそれを受け、何かを「クィアする」ことを、「ある事柄にまつわる言説が依拠しているさまざまな規範を問い直なおし、脱中心化していくことで、新たな思考を形成していこうとする営み」（飯野 2007, 82）であると考えている。飯野はさらに、「解放的な言説や対抗的な言説も問い直され、脱中心化されていく」（同）ことも想定している。伊野真一が「クィア・パースペクティブ」（伊野 2001, 195）と呼んだ脱アイデンティティへの可能性は、それ以前にあった日本でのいわゆる「ゲイ・スタディーズ」における安定したアイデンティティに基づくと思われる「（主にゲイ）アイデンティティ・ポリティクス」への対抗言説であるように認識されている。ゲイ・アイデンティティというのは、「同性愛者」という存在を可視化させる、つまりゲイというカテゴリーを自認し、その存在を表象することで可視化させるポリティクスである。ゲイ・スタディーズは、同性愛/異性愛を規定し前者を不可視化および抑圧する強制異性愛社会に対して、可視化による強制異性愛社会への対抗という強力な論陣を張っていた。その意味では、中心化、さらにそれが不可変で生来的なものとしての中心化を示唆するような動きもあった。同性愛者の存在を社会に訴えるために必要なことは「同性愛および同性愛者の顕在化」だ（ヴィンセントほか 1997, 40）と述べているように、『ゲイ・スタディーズ』をめぐるアイデンティティ・ポリティクスの言説の中では、この不可変性と中心化が存在している²。SHIPでの活動もこの顕在化目標のために、不可変性と中心化を踏襲することがある。違いがあるとすれば、ゲイということばがセクシュアル・マイノリティに入れ替わる程度である。

確かにこれは、「クィア・パースペクティブ」からすれば批判の対象となるものである³。しかし、「運動の文脈」では現在も可視化という

² しかし直後にこうした顕在化はおのずから生じるものではなく、主体化の過程と様々な周囲の状況からの要請、還元すれば社会的な情勢の変化の複雑な相互の結びつきによるものなのである（ヴィンセントほか 1997, 40）と、その構築性を指摘している。当時のゲイ・スタディーズであっても、言われるほど「本質主義」というわけでもない。

³ 伊野は、「現実の運動では、『同性愛/異性愛』という枠組は支持され、当事者の性的指向の非選択性が横すべりし、生得的自然のものとして権利付けを行おうとする傾向が存

キーワードで十分に存在しているといえる。その理由は、対抗言説を構築する場合、内在化されたホモフォビアや性別二元論に対して、まずその現状を認識するところから始めなければならないからだろう。その現状認識のためには、カテゴリーの規定は身体化され非常にわかりやすくはたらし、脱中心化はわかりにくく場合によっては危ういものになる。浅田彰のような「ある段階で、ゲイならゲイ、レズビアンならレズビアンでまとまって運動しなきゃいけないという場合には、アカーのいう『戦略的本質主義』に基づいてアイデンティティ・ポリティクスを展開することも必要だろう。逆に言えば、そういう運動がかなり広がった後で、あるいはそれと同調して、初めてクィアの開放性や多様性ということが意味を持つんじゃないか」（浅田ほか 1997, 22）という、まず可視化を促し、そして脱中心化させていけばいいという提案は、良し悪しは別として、危うさ回避のためだと思われる⁴。今、ホモフォビアや性別二元論との葛藤に苦しんでいる個人に対して脱中心化という概念は、とらえづらく時には自己意識を崩壊させる危機を招く。また、飯野のような「クィア」の理解は解放的な言説をも対象としていることから、さまざまな緊張関係を生み出す。強制異性愛社会への対抗言説にとって、この脱中心化はときに都合が悪くなることから、徐々に「理論」と「実践」という名前で乖離イメージを生み出していったのではないか。

3. 「理論」と「実践」イメージを生み出す「当事者」の概念

伊野のほかに堀江有里も、フェミニズム論争の中で「一つの象徴的な立場として、<学>と<運動>の関係、すなわち<理論>と<実践>の関係が問われてきた」（堀江 2001, 76）ことを指摘しており、「両者の乖離が叫ばれる一方で、そこには<当事者性>の問題が、議論されてきた」（同）こと、「レズビアン/ゲイ・スタディーズにおいても、その初期は<当事者性>を強調する必要があると、私は考える」（同, 77）とレズビアン/ゲイ・スタディーズとの類似性を指摘している。それは先の「運動の文脈」と「差異の思考」の対立にも重なる。

在する。いわば、本質主義が抵抗の言説として機能し、理論と実践の乖離が生じている」（伊野 2001, 198）と批判している。しかし、これを「理論」と「実践」という形で対抗軸にできるかというのは疑問が残るところである。

⁴ もっとも、そのカテゴリーに誰が入るのか、誰が排除されるのかの暴力性については論じられるべき問題である。また、浅田は「そういう運動がかなり広がった後で」と述べているが、クィアの開放性が論じられるほど広がる時がいつなのか、どうなったら運動が広がったと言えるのかということを予測していない。また運動はたえず戦略的で現在進行形であり、このような単純移行モデルが有効であるとは、特にマイノリティ研究においては考えられない。

フェミニズムにとどまらず、エスニシティ、障害学、ポストコロニアリズムなどの議論でもこのことは同様に常に議論的になっている。アイデンティティ・ポリティクスや「戦略的本質主義」と言われるものとそれに対抗する反本質主義もしくは脱アイデンティティ指向というのは、今回話題にしている「クィア」をめぐる分野だけにとどまらない。

先に、この対立は妥当であるか問いかけた。別の分野でもこの対立への異議申し立て、不毛さの指摘がなされている。

戦略的本質主義という言葉は、運動を戦略の問題に切り縮め、研究には本質主義と非本質主義という余り意味のない分断を持ち込むことに結果する。記述をめぐる現場主義と観念的な解釈学は明らかに共犯関係にあるのであり、それはときには、運動にかかわる活動家の言葉と原理論的な学者の言葉という二つの形をとって、登場することになる。(富山 1998, 119)

セクシュアリティやセクシュアル・マイノリティにおける議論でも、「実践」が「理論」と「共犯関係」にある例は現実としてたくさんありうる。たとえば行政とのからみで、財政的な支援やポリティクスを訴えるとき、「理論・研究」というものが盛んに利用される。一方で、「理論・研究」がフィールドとしてその「実践」を行なう。つまり、「理論」と「実践」は表裏一体をなしているものであり、切り離すことはできない。また、同一人物が「理論」と「実践」を行なっている例もたくさんある。そうなると、「実践」は「理論」でもあるということになり、アイデンティティ・ポリティクスや「(戦略的)本質主義」は理論でもあるということになる。

また「戦略的本質主義」をめぐる議論に関してガヤトリ・C・スピヴァックは「戦略は理論的なものの辛抱強い(脱)構築的批判によって機能します。『戦略』とは戦陣を敷いたコンセプト・メタファーであり、理論とは違って利害関係がない普遍的なものに由来していません」(スピヴァック 1989=1994, 53)と述べる。スピヴァックが問題にしているのは「脱政治化」した普遍的理論のことだと思われるが、いわゆる「クィア理論」も同様であるといえるだろうか。そうは考えられない。「クィア」をめぐる言説やポリティクスが普遍的理論を装い、事象を無関心に同じ体系で説明しようとしたことがあっただろうか。「クィア」は徹底した(脱)構築批判をすることで効果を発揮する「戦略=実践」、抵抗の概念でもあるため、普遍的「理論」にはなりえない。なった瞬間にそれは固定化され、まさに「クィア」ではなくなるだろう。つまり「クィア」な言説は、「戦略」の産物でもあるということになる。そこにある「理論」と「実践」の「戦略」の違いをリスト化することは不可能になり、また有効でもない。

しかし、二項対立イメージが作られやすいのはなぜだろうか。それは、堀江が言うアイデンティティ・カテゴリーに基づく<当事者性>が関連しているのではないか。2000年ごろから、セクシュアル・マイノリティの可視化の流れと同時にマイノリティの「当事者」による「正しい知識」化がおこなわれ、当事者語りの大量消費の契機になっていった。「当事者」というものは、その問題に対して経験的/専門的に知っているという特権的なイメージがあり、この「当事者」というキーワードを、何も知らない「非当事者」のために、また葛藤する「当事者」のエンパワメントのために、SHIPの活動でも用いることがある。SHIPの理念として基本となっていることの1つに、「当事者による」コミュニティセンターということが挙げられている。その理由は、自主的に肯定的に社会に働きかけるためという「当事者」主体的動機に基づく。

しかし、この当事者というのはいったい誰のことを指しているのか。「クィア」をめぐる問題の中で、性的指向については外見身体に依拠した他者からの「承認」や認識が生じない場合があるため、より「当事者性」が主観的であいまいなものになりやすい。『「オカマ」は差別か』に収められたすこたん企画の抗議を発端とした一連の議論では、この「当事者性」が議論となった。

今回の議論の中で、すこたん企画は何度か、当事者が「オカマ」と言う場合とそうでない場合とでは「似て非なること」であるといった主張を展開している。(略)しかし、多くの場合、いったい誰が「当事者」なのかという議論が置き去りにされてしまう。(略)「ゲイ」を巡る問題について発言している人のうち、だれが「当事者」で誰がそうでないと、誰がどうやって判断を下すのか、誰にも答えられないはずである。(平野 2002, 116-17)

しかし、「運動の文脈」の場では「当事者」が誰なのかあいまいなまま、「非当事者」の強固な要請のもとに使われている。「当事者」と「非当事者」というものがどのように線引きされ存在しているのかは不明確である。しかし、「当事者」の言説の特権性は「当事者」が授業または講演等に呼ばれ、語るという点において、前提となる枠組みを繰り返し(再)構成している。クレア・マリィは、これを「表面的な当事者性」と呼び、「当事者」こそを拘束する意味で問題含みであると指摘する。

自らの「当事者性」を否認する者が権力関係を通して隠蔽された「当事者」に対して表面的に「理解」を示すことにより、「当事者

性」が排他的に作動し、「当事者」からのみ説明を要請する仕組みが成立してしまう。(マリイ 2007, 67)⁵

確かに、「当事者」が「非当事者」の要請により授業または講演等に行き、何かを語るということは、支配的な言説の観点からみれば「当事者」を中心化し、その異性愛中心主義の構造も性別二元論の構造も権力関係上温存させたまま「かわいそうな人の生きづらさ」の再生産を行ってしまう危険性がある。

SHIPにおいても、この指摘はある程度当てはまる。「当事者」が「非当事者」の要請により授業または講演等に行く活動が「表面的な当事者性」によって強固に再生産されるという問題が指摘できる。しかし同時に、この「当事者」が誰なのかあいまいになっている状況が、この対立構図をあやふやにする結果をもたらす。以下、SHIPの例を紹介する。

4.1つの「運動の文脈」におけるポリティクス

SHIPは、神奈川県との協働事業として、2007年9月にセクシュアル・マイノリティのためのコミュニティセンターとして活動母体の横浜Cruiseネットワークによって設立された⁶。「運動の文脈」にはさまざまなものが想定されるが、パレード等のイベントではなく日常として存在しているコミュニティセンターは可視化された存在であるため、「当事者」であるSHIPが「非当事者」とされている公的機関⁷の要請で出張授業または講演等に行き、何かを語るということも業務の一環となっている。

SHIPは活動理念として、前述した「当事者による」コミュニティづくりのほかに、1)セクシュアル・マイノリティが暮らしやすい社会作り、2)HIV等性感染症感染者の減少、3)HIV等性感染症の早期発見・早期治療（AIDS患者の減少）の3つを掲げ、具体的に1)性感染症予防啓発活動（以下、予防啓発活動）、2)心のサポートと情報提供の場としてのコミュニティセンター運営（以下、コミュニティセンター運営）、3)セクシュア

⁵ ここでマリイは、「当事者」や「当事者による」発言・行動を問題視しているのではなく、結局語りが支配的言説によって限定された「当事者性」として排他的に作動する可能性を危惧している。それは「本来社会全体の問題である事柄であるはずのものに、「当事者適格」概念をあてることにあり、限定された人間の集合に責任を押し付けてしまう」（マリイ 2007, 67）からである。

⁶ 2012年4月より、特定非営利活動法人SHIPとなり、神奈川県との協働事業も終了した。コミュニティセンターの名称も、かながわレインボーセンターSHIPから、SHIPにじいるキャビンに変更した。

⁷ 後述するが、ここでは孤立した青少年活動に対する支援に特に力を入れるというSHIPの活動特性上、その相手は神奈川県の教育委員会や中学・高校等の学校、県内の人権課等部署が中心になっている。

ル・マイノリティの人々が暮らしやすい街づくりのためのキャンペーン活動（以下、キャンペーン活動）を行なっている。コミュニティセンターは「一般社会とセクシュアル・マイノリティのいわゆる小さなコミュニティをつないでいく役割」を担うことで、「孤立しがちなセクシュアル・マイノリティをどのようにして本人が望む場所へとつないでいくか」（吉仲・星野 2012, 156）を主軸として考えている。

SHIPが特に力を入れてターゲットにしてきた年代は10代である。その理由は、メンタルヘルス支援が必要とされる若年層への支援が、現在のセクシュアル・マイノリティ支援の中でもっとも未実現である現状に対する危機感からである。インターネットの発達によって情報収集方法は大きく変化し、インターネットさえ使いこなせば、同じセクシュアリティと思われる誰かに友人関係を求めてコンタクトが取れるようになり、またすでに何年もセクシュアル・マイノリティのための商業施設等に出入りしている人と同じように、経験が浅いユースも入っていけるようにもなった。しかしインターネットの掲示板は成人がセックス目的の出会いとして利用していることが多くあるため、多くの10代が持っている、友だちを作りたい、孤立や不安感を吐露して解消したいというニーズとあっていないどころか、さまざまなリスクがある。HIV/性感染症の拡大や、インターネットで販売されているホルモン薬の服用など身体的/精神的/契約的トラブルを起こすケースが挙げられる。

今まで「運動の文脈」と「学問・研究」の両方は20代以上の「成人」によって担われてきたが、それは20代以降がふさわしかったからではなく、それ以下が存在として認識されえなかったことが原因である。10代の「当事者」にどのようにメッセージを届けるか、教育行政が絡んでくること、そして10代は圧倒的な時間を学校で過ごす事情を考えると、アウトリーチは非常に困難である。小宮明彦は、教員が先導する（中）学校の性教育事情からそのことを端的に示す。

研修会で同性間性的接触による性感染症への罹患が増えていることを学んでいながら生徒への伝達に際しては躊躇している教師や、性同一性障害の当事者の講演を聞いて勉強してきていながら優先課題としての認識状況や時間的理由から医療者の講演内容に性同一性障害を含めないよう要望した教師がいることもわかった。（小宮 2011, 149）

SHIPは神奈川県教育委員会とのつながりで、直接県内の高校の生徒相手に出張授業に行くことがある。しかしそれは数が非常に少なく、多くは職員研修や校長会など、やはり教員へのアプローチが中心となっている。生徒へのアプローチは学校教員というワンクッションが置かれることが多いので、どうしてもセクシュアル・マイノリティが身近に存在

していることを伝えにくい状況がある。SHIPにとって「当事者性」が重要な理由はそこにもある。そのため、SHIPでは高校生の「当事者」が出演し、そのライフストーリーを収録した『10分でわかる思春期の恋バナークラスに1人はいるかもしれないセクシュアル・マイノリティ』⁸というDVDを作成し、県内の高校等に配布した。10代のセクシュアル・マイノリティが実際に存在していることをアピールすることが目的であるが、それは現在「当事者」をめぐるアイデンティティ・カテゴリーのとらえ方がどのように展開されているかの資料にもなる。まずはこのDVDでのライフストーリーを、今まで議論された「当事者性」もしくはアイデンティティ・ポリティクスの議論と照らし合わせながら分析する。

5. ライフストーリーの「当事者性」とアイデンティティ・ポリティクス

公開可能な10代の「当事者」のライフストーリー映像は現在においてもかなり珍しい。つまり10代のセクシュアル・マイノリティの置かれた立場は1990年代の状況と「可視化のための当事者性」という点においては共通している。もちろん、社会全体的なイメージなどの変化や「性の多様性」言説後という点は違うものの、「当事者性」を考える1つの材料と考えたい。

まず、DVDの中心人物であるソウイチは、ゲイであることに気づいたこと、ゲイとして生きていくことの2段階のフレーズに分けられている。第1段階は、中学の英会話の授業時に体験した外国流のあいさつ学習時（男子生徒との握手、ハグ）における気づきである。

それをやったときに、「ん?これは」みたいなのがあったんです。それでそのあとからそのある1人のことが気になって、気付いたらその人のこと見てるし、なんだこれと思って、これが好きなのかって気づいたんです。で、その相手が男の人だったからそこで最初はなんか気づきました。(かながわレインボーセンターSHIP (編) 2011)

しかし、それはゲイとして生きていくことを意味しなかった。そのきっかけとなった第2段階は次のように語られる。

⁸ このDVDは、2部構成になっており、ソウイチを中心に放課後という設定で、教室で撮影しているシーン1と、SHIPで友人と座談形式で話すシーン2に分かれる。シーン1では、ヒロが聞き手、ソウイチとケンタが話し手というインタビュー形式をとっており、シーン2はソウイチとアイナ、リョウタとサワの4人が雑談している設定である。編集の段階で、トピックごとにくぐられ、シーン1とシーン2がまたがるということも起こっている。

そのあとは、なんだろうな。基本的には自分の中であんまりこう飲み込んでなかったっていうか、他人事みたいな感じでモヤモヤしてて、高1の冬のときにインターネットでゲイの人が書いてるマンガ?があって、そのゲイの友達たちと居酒屋とかに行って楽しく飲み会してるシーンがあって、それを読んだときに、今まではゲイって人たちがどういう風に生きてるか、そういうなんか、人とどういう関係性を持ってるかみたいなものが全く見えてなくて、でも、それを読んだときに書いてあるのがすごい楽しそうだったから、別に男の人が好きでもこんな楽しそうな人生が送れるんだって思って、自分はゲイとして生きていくんだなあとすごいハッキリ自覚しました。(同)

ソウイチは、ゲイであることに気づいたあとに、「他人事のような感じ」が続いたと表現しているが、内面化されたホモフォビアとの葛藤が原因だとは発言していない。その理由は、その後のソウイチの学校の友人へのカミングアウトで、「そのあとからいろんな人に言うようになってきて、感じたのは、少なくとも同年代の子は、もう偏見とかない子が多いんだなっていうか」(同)という発言に見られる、あからさまなホモフォビアの経験の少なさも影響しているかもしれない。しかし、ヴィンセント、風間、河口が「事実、自分以外の『同性愛者』像は私たちの認識の中でも当初はすでに『体系的な誤認』に縛られてもいる。私たちにとっても『情報の不足』と『無知』は濃い影を落としている」(ヴィンセントほか 1997, 188-9)と指摘するように、ゲイであることにコミットできない理由が生き方の見えにくさ、ロールモデルの欠如にあることと読み取れる。そしてDVDでの「可視化された高校生ゲイ」という表象は、今までにメディアに取り上げられる形で表象されえなかった「ユースのゲイ (か、セクシュアル・マイノリティ)」という「当事者」のポリティクスだと言えるだろう。

また、ソウイチの「ゲイに生まれる」ことと「ゲイになること」の分断と受容のされかたには、背景にある生得的な何かが関係しており、それは聞き手にも共有されていることが読み取れる。

アイナ：自分がそういうふう（≡マイノリティ：著者注）に生まれ
てよかったって思う経験とかって…

ソウイチ：もし自分がセクシュアル・マイノリティじゃなかったら、
ここまで（人間関係を：著者注）広げられてなかったなって、すごい
思う。だからそこがすごいよかった。(略)

自分はやっぱりゲイに生まれてよかったって思ってるし、自分は生
まれ変わってもゲイになりたいなって思うって。(かながわレイ
ンポーセンターSHIP (編) 2011)

『ゲイ・スタディーズ』においても、「同性愛者」という徹底した構築的アイデンティティの記述と、それより前に何やら想定されている「同性愛者」が錯綜する。「私たちは（異性愛者も含めて）『何も手本もないところで何者かである』ことはできないのだ」（ヴィンセントほか 1997, 204）とアイデンティティの構築性を見出しつつ、その直後「私たちの『孤立』とはこのことを指している。孤立させられている同性愛者が、すなわち同性愛者とは何者であるかを知らない者たちが自分の同性愛を考え始めるようになるためにも、誰かほかの同性愛者の経験を聞いたり、参考になるような生き方をしている人を見出すことが不可欠なのだ（傍点著者）」（同）と、アイデンティティ構築以前に存在する「同性愛者」を前提にしている。

このことは「当事者」によるアイデンティティ・ポリティクスからというより「非当事者」の使う言語の引用によって強かに規定されている。たとえば「アカーの活動を紹介した朝日新聞（1993年10月22日）の記事も『いま、欧米を中心に世界の趨勢（すうせい）は、同性愛を、皮膚の色などと同様、本人の意志では選択や転換ができない「性的な志向』』として受け入れつつある（傍点ママ）⁹」（ヴィンセントほか 1997, 210）と、近い将来欧米と同じようになるだろうという単純なグローバリズムイメージの流れとして把握されている¹⁰。

確かにこのことは、単純に異性愛規範社会に対して対抗言説を構築するという意味においては戦略的に効果があるものと思われる。しかしそもそもこの「同性愛者」という戦略は、異性愛規範の要求する性別二元論にのっとらなければ十分な効果を発揮しない。たとえば掛札悠子は「自分を『男』だと思っている『彼女（彼と言うべきか）』』と比較して、「彼女たちが抱えている課題は自分が女であることであって、自分が好きになる対象が女だということではない。一方、レズビアンは当然、自分は『女』だと認識している」（掛札 1991, 99）と、トランスジェンダーではないレズビアンの「女」自認としてのアイデンティティを想定している。性同一性障害言説が登場するまで、このアンチ・ホモフォビア

⁹ ここでヴィンセントらは、あくまでも性的「指向」について当てる漢字に含まれるホモフォビア、私的領域に押し込める暴力性を見出すための記述を展開しているが、これも1つの生得的かどうか問うための対抗言説といえるだろう。

¹⁰ また、アカーの裁判の判例が収録されている判例集では、解説として「同性愛者については研究が進み、選択的な性的趣向の問題ではなく、より生来的な問題であると考えられつつある。少数者であり偏見にもさらされている。だとすればこれを『社会的身分』と解し、この種の差別事例には厳格審査を及ぼすことも考えられなくはない」（君塚 2005, 69）と、やはり生来的な問題を指摘している。「当事者」のポリティクスにかかわらず、常に「非当事者」からの解釈という行為によってアイデンティティが作られていくことを端的に示している。

の実践は説得力があったように思われる。イヴ・K・セジウィックは、同性愛/異性愛の二項対立は排除しつつ包摂する関係であることを指摘する (Sedgwick 1990=1999)。たとえば「女のような男」「男のような女」という表現のように、そこにいる人のジェンダー表象がいかなるものであっても、受け手はその身体の性という認識に回収していくことを意味する。「女のような男」が社会的に排除されつつも、本当はその人はゆるぎなく「男」であるという認識も同時に働き、再度包摂しようとする。強制異性愛主義への対抗言説の実践は「同性愛者」のアイデンティティ獲得であるという説明が『ゲイ・スタディーズ』でなされているが、同時にトランスジェンダーではない男性/女性のアイデンティティ獲得の作業も水面下で行なわれていることになる。そしてなぜ性自認への違和感がなかったのかということの説明を避けながら、異性愛主義への挑戦という目的に向かって進むことが可能になっていた。

しかし日本において、性同一性障害言説以来、この「同性愛者」の構築がより困難になっているものと思われる。アイデンティティ構築以前に存在する「同性愛者」という存在をそのまま借りるならば、この存在は「体系的な誤認」「情報の不足」「無知」で「孤立」しているため、異性愛規範の認識がそのまま適応される可能性がある。つまり、以前のように「同性愛者」が同性愛を受け入れられない理由を内在化されたホモフォビアに求めることができるかどうか、怪しくなる。男を好きになる「女のような男」は本当に女なのかもしれない、女を好きになる「男のような女」は本当に男なのかもしれないと他者に/自己に判断される可能性が出てきたからだ。

同性愛者のなかには、自分が同性に対して性的な意識を抱いていることに気づいたときに、自分の体の性を換えなければならないのではないかと感じた人が少なからずいる。(略) 同性に惹かれる感情を性的指向の問題とするのか、性自認に合わせて身体の性別を換えることでその違和感を解消するのかは、つながっているのではないか。(風間・河口 2010, 169)

伊藤悟は、セクシュアリティを図解したときに注として「究極的には<性>のあり方は『自己申告制』でしかありえないともいえます」(伊藤 2000, 19) と述べた。1人のセクシュアリティについて他者が規定することはできない。また、性同一性障害言説にも、性別二元論的認識の容認が一部存在することになった。つまり、アイデンティティ構築以前に存在する「同性愛者」は、「同性愛者」のアイデンティティを取るのか、「性同一性障害者」を自らに内面化させるのか意識しなければならなくなった。SHIPにおいても、同性愛と性同一性障害の違いの説明要求はもっとも頻繁にみられる注文の1つである。SHIPは、Letterというチラシの第5弾(Q&A形式)でこの問題に答えている。

同性愛は、同性を恋愛や性の対象にすることを言うんだ。「自分は男の子で、男の子が好き」とか、「自分は女の子で、女の子が好き」という状態のことだね。

(性同一性障害は) 誰を好きになるかという問題じゃなくて、自分で自分の性別をどう感じているか、という「自分についての感じ方」の問題なんだ。(「Presence Letter5」より)

性別二元論に基づく異性愛規範では「ゲイの人が男の人を好きになるってことは、その人の心は女」であり「ゲイやレズビアンの方は性同一性障害」なのだと解釈されやすい。それに対しては『自分が女や男であると感じること』と『誰を好きになるか』は別のこととして、いったん切り離して考えると、わかりやすいんじゃないかな(同)と回答する。つまり同性愛と性同一性障害を「いったん切り離して考える」ことを推奨する。それにより、この2つを「戦略的」に分断する。その理由としては、とにかく性を変えたいとインターネット上で販売されている薬に安易に手を出したり、性別適合手術についてよく調べずにあせって受けようとしたりすることを防止する目的があるからだ¹¹。しかしこのような「戦略的分断」を取りながらも、風間と河口が指摘するように同性愛と性同一性障害をめぐる2つの事象は、実際厳密な線引きをすることはできず、本来緊張関係を持つものである¹²。ホモフォビアへの対抗のための「同性愛者」アイデンティティを採用する場合、それは自らのトランス性を無意識でも否定することが含まれる。また、トランスジェンダーまたは性同一性障害にコミットする人が性別二元論をどうとらえるかもさまざまなので、トランジットしたあとの「性別」と逆の「性別」に性的欲望を感じるなら、性的指向の問題と関係ない(マイノリティではない)と言ってしまうことも可能である。現在「運動の文脈」は、ホモフォビアへの対抗と、性別二元論への対抗という2つの軸が分けられるようになっており、前者を「同性愛者」である「当事者」、後者を「性別二元論に違和感があるトランスジェンダー」の「当事者」が行なわなければならないようになった。特にトランスジェンダーの「当事者性」に頼る理由は、医学的枠組みに絡んでくる知識や経験を「同性愛者」が行なうことが困難になったことが挙げられる。しかしこれは同時に、この2つの「本質的」分断をうながす可能性が常にある。

¹¹ 毎日新聞東京版で2010年6月に行なわれていた連載「境界を生きる：子どもの性同一性障害」に、ホルモン剤の個人輸入をしている生徒の例と、その危険性が指摘されている(6月13日)。その後の反響を掲載したときも、同様の例が掲載されている(7月14日)。

¹² ここまでの議論だと、自らの性自認が性的指向と必ず関係があるようにも感じられるが、もちろん、性的指向とは関係なく存在するジェンダー違和も性自認に大きな影響を与えていることは注記しておく。

これはそもそも、「非当事者」に対してポリティクスを行なっていくとき、オーディエンスが想定しそうなものであり、一時的にも「当事者」が引き受けなければならない異性愛規範のイメージに合わせているからである。しかしながら、同時にこの「当事者」「非当事者」の連続性もしくはカテゴリー分断の矛盾が「当事者性」を壊す契機になることもある。枠組みは「当事者」からスタートするが、その言説が内部で矛盾を起こす現象の例を次に見ていくことにする。

6. 「当事者」と「非当事者」の連続性、「当事者性」とアイデンティティ・ポリティクスの不連続性

SHIPの活動理念である「当事者による」コミュニティセンターの話は前述したが、スタッフや来場者は全員セクシュアル・マイノリティでなければならないという規定はなく、実際にセクシュアリティがあいまいなスタッフもいる。しかし基本的には、「当事者」が「当事者」をサポートしたり、(主に「非当事者」に向かって) 語ったりすることが基本になっている。その意味では「当事者」と「非当事者」のカテゴリー分断は事前に行なわれている。しかし前述の「当事者性」のあいまいさのせいで、SHIPスタッフの語りは矛盾を帯びたものになることがある。

わたしがコーディネートする講演等の場合、複数のスタッフとともに行くことが多い。複数のスタッフにそれぞれライフストーリーを語ってもらい、最終的にセクシュアル・マイノリティ、そうかもしれない人に対してどのように接していけばいいのかを総括する形をとる¹³。ライフストーリーを使う理由は、いるかどうかわからない人の抽象的な話にせず、「当事者」の「可視化」を全面的に出すことによって、想像しやすくするためである。そこだけ見れば、「当事者」中心的なアイデンティティ・ポリティクスのようにみられるだろう。しかしたとえば、スタッフのEさんは、スタッフによる講演のさい、「自分が当事者であるかどうかわからず、ここで話していいのかわからない」と前置きする。Eさんは、自らが女性の身体を持っていることを認識し、女性が好きになることもあることを自覚している。しかしEさんは自らを「レズビアン」と規定せず、また女性とつきあった経験もない。現在FTM (female to male) トランスジェンダーの人とつきあっているという状態で、FTMの人とつきあっていることが自らの性自認および性的指向を不安定にする原因であることも語っている。

¹³ ただし、どのような授業を行なうかは毎回異なっており、このパターンにあてはまらない場合もある。また、スタッフも毎回同じメンバーではないため、常に以下に展開される「当事者」「非当事者」の矛盾が露呈されるわけでもない。

つまりEさんは、FTM（つまり男性とみなすべき存在）とつきあっている女性、つまり「非当事者」である異性愛女性というカテゴリーにあてはまることになり、イメージ上「当事者」ではなくなる。さらに、つきあっている人のセクシュアリティが、自らのセクシュアリティ（性自認、性的指向）に直に影響する可能性は、「非当事者」も同様に持っており、「非当事者」と「当事者」の連続性の露呈している¹⁴。しかしここでEさんが「当事者」として存在し、「非当事者」に向かって語りかける一見奇怪な現象が起こっている。ここでは「当事者」「非当事者」が誰なのか明確にされずにポリティクスが展開されている。Eさんは、「自分を特定のカテゴリーに規定せずに発信していくことがとても大切」と語っている。ここで重要なことは、「当事者」のアイデンティティ・ポリティクスである『ゲイ・スタディーズ』にもソウイチの発言にも見られなかった現象がみられることである。

さらにEさんの発話は、「当事者」とアイデンティティ・ポリティクスの連続性にも疑問を投げかけている。『ゲイ・スタディーズ』において「当事者」が発信するときは、「同性愛者」としてのアイデンティティ・ポリティクスを行なうことが前提として機能しており、またそうすることが強制異性愛主義と戦うための必須条件だったが、Eさんの語りは「当事者」の前提もポリティクスに先行するアイデンティティ・カテゴリーもない。

講演や授業はあらかじめ「当事者にしかわからない問題を当事者に語ってもらう」といった「表面的な当事者性」が期待されているが、Eさんの発話はその前提を危うくする¹⁵。「表面的な当事者性」が成立するためには「当事者」か「非当事者」かがはっきりしている必要があり、「当事者」は自らのセクシュアリティを固定してアイデンティティ・ポリティクスを行なうことが求められるが、ここでは明確にできないことがポリティクスの主軸である。「当事者かどうかわからない」という不安定さはアイデンティティ・ポリティクスの立場からは自己矛盾を露呈し効果がないもののように感じられるが、それをそのまま聴衆に向けて語るという作業によって、「当事者」によるアイデンティティ・ポリティクスという従来のイメージとは違った政治を展開させている¹⁶。それ

¹⁴仮にEさんの「当事者性」が将来の可能性としての「女性に性的魅力を感じる女性（レズビアン）」として語られるならば、それは現在の恋愛関係と一致していないうえ、今本人が自認していることでもなくなる。

¹⁵しかしこれは重要な指摘だが、これによって「表面的な当事者性」の枠組みまで問えるかは別問題である。

¹⁶「不安定」さは、たとえば講義のあとで、聴衆同士が互いにマイノリティでないか確認する作業などから確認できる。単純な（ホモ/トランス）フォビアの現れともとらえられるが、自分とは連続性がない他者の話であれば現れにくい反応である。

により「当事者」によるアイデンティティ・ポリティクスのはらむ「当事者」「非当事者」の想定とともに、固定的アイデンティティ・カテゴリーによるポリティクスの問題も同時に浮き彫りにさせる。

以上をまとめると、Eさんの語りは「同性愛者」のアイデンティティ・ポリティクスを展開させることも「異性愛者」のそれを展開させることも回避しながら、「当事者」でも「非当事者」でもある（もしくはない）状況からなされる。そしてこれらを分断させることにより成り立つ「当事者」のアイデンティティ・ポリティクスという「運動の文脈」が持っていたとされる従来の連結イメージを問題化する。大切なことは、これが「運動の文脈」と言われる活動の中で行なわれていることだ。そしてこれらの矛盾をはらみ、緊張関係を浮き彫りにさせる実践の蓄積が、「クィア」な実践的理論を構築する材料になるのではないか。

7. 「当事者」の複数性と「クィア」の関係

以前、「同性愛者」や「トランスジェンダー」の「当事者」と、そうではない「非当事者」というカテゴリー分断による「運動の文脈」のポリティクスは、本質主義的なアイデンティティ・ポリティクスであるという批判が「クィア」な分析からなされていた。今、それをどのようにとらえ直すべきだろうか。

本稿では、3つのことを提示した。1つは理論と実践は分断不可能であること、次に「当事者」と「非当事者」は連続しているということ、最後は「運動の側面」による「当事者」が依拠するアイデンティティ・カテゴリーは固定的ではないことだ。今まで、実践は「当事者」のアイデンティティ・カテゴリーによって効果を持ち、それは「非当事者」を外部に想定することによりポリティクスを展開するという、一連のイメージが成り立っていた。それを「クィア」な視点である「差異の思考」がアカデミックな立場から批判していくというものである。しかし、まずクィアな視点による理論が実践と乖離されていたことはなく、また「運動の文脈」での「当事者」によるポリティクスが、その講義の前提である「当事者」「非当事者」という固定に反して、実際はあいまいになるどころか分断の不可能性をも露呈する例をSHIPの行っている活動から紹介した。つまり、実践の場の「クィア」な可能性である。

SHIPの授業や講演では、限られた時間内で語らないといけないこともあり、常に情報を整理しなければならない。この整理という作業に、わかりやすいアイデンティティ・カテゴリーや「当事者性」が引用され、一方では「クィア」とはいえないようなカテゴリー分断と「表面的な当事者性」が登場する。しかし同時にEさんのような語りは、「当事者」の特権を失わせ、「非当事者」との不可分性を示すことでそこをカオスな

場にする。そこは、常にカテゴリーに基づくポリティクスの矛盾が露呈する場所になるが、その不安定さやわかりにくさが、「当事者」をも縛る「表面的な当事者性」の権力関係に異議を唱えるきっかけとなる。これは、「カテゴリー」単位の話ではなく、個人のストーリーとして可視化されたとき、つまり1人1人の「当事者」に注目したとき明らかになるものである。これはSHIPの実践においてもっとも効果的（だが非意図的）な仕掛けであるといえよう。

しかしそれほど楽観的なことも言えない。上記のような「当事者」「非当事者」のカテゴリー分断の転覆実現のためには、事前にある程度の多様な存在が必要となる。ところが複数になるといわゆるLGBTバランスという別の問題が発生する。つまり「性の多様性」と言いながら実際は偏ったアイデンティティ・カテゴリーの人たちばかり（しかも、そのほとんどがゲイ）が語るという表象の不平等とジェンダー非対称性の問題である。「ゲイ・ブーム」と言われた1990年代初頭の事象について掛札が『同性愛』と言われ、原因をさぐられ、治療が考えられているのは『同性愛者』とくくられてはいても、実際には常に男性である」（掛札 1991, 101）と指摘したようなジェンダー非対称性に代表される。

確かにこの問題は追及されるべきものではあるが、それは「当事者」によるポリティクスを表象させることでアリバイのように確保すれば解決する問題ではない。しかしながら、複数の「当事者」が語る場合、実際外見上のLGBTバランスのことを無考慮に進めることができない。「当事者」「非当事者」のカテゴリーを無化するか、各セクシュアリティのアイデンティティ・カテゴリーを細分化させ、個人が各セクシュアリティの代表のようにカテゴリーを下支えするかは語る個人次第の状況にもかかっている。

ではこのポリティクスにはどのような可能性があるのだろうか。佐藤（佐久間）りかが指摘するような、性別二元論や「異性愛もまた社会的構築物であるという認識」（佐藤（佐久間） 2007, 183-4）に到達するためには、少なくとも現在では語りによる「表面的当事者性」を「当事者」「非当事者」双方にとって無意味なものにしてしまう、Eさんの語りの有用性を「クィア」な実践の蓄積として注目していく必要があるであろう。

SHIPという「運動の文脈」では、「クィア」とはいえそうにないカテゴリー依拠的な「当事者」枠組みの中に「クィア」な語りの実践が存在するという、ねじれた関係を構築している。「当事者」とされる1人1人が、イメージされるアイデンティティ・カテゴリーと不適合を起こすことが暴露されることによって、「当事者」のアイデンティティ・カテゴリーによるポリティクスは構築されながら一方で解体される実践が

SHIPでは展開されている。それは、「理論—実践」「当事者—非当事者」のアイデンティティ・ポリティクスを固定させないための「クィア」な実践といえるだろう。

参考文献

- McLelland, Mark. *Queer Japan from the pacific war to the internet age*. Oxford: Rowman & Littlefield, 2005.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Epistemology of the closet*, Berkeley: University of California Press, 1990. = 外岡尚美 (訳), イヴ・K・セジウィック 『クローゼットの認識論—セクシュアリティの20世紀』 青土社, 1999
- Spivak, Gayatri Chakravorty. *In a word: Interview (with Ellen Rooney)*, 1989. = ガヤトリ・スピヴァック 長井香里 (訳) 「一言で言えば…」 『批評空間 2-3』, 1994:52-68.
- 浅田彰・鄭暎恵・クレア・マリィ (司会=河口和也). 1997. 「レズビアン/ゲイ・スタディーズの現在」 『現代思想』 25 (6) :18-57.
- 飯野由里子. 2008. 「『クィア』するとはどういうことなのか」 『女性学』 15:78-83.
- 伊野真一. 2001. 「構築されるセクシュアリティ-クィア理論と構築主義」 上野千鶴子 (編). 『構築主義とは何か』 勁草書房:189-211.
- ヴィンセント,キース・風間孝・河口和也. 1997. 『ゲイ・スタディーズ』 青土社.
- 風間孝・河口和也. 2010. 『同性愛と異性愛』 岩波書店.
- かながわレインボーセンターSHIP (編). 2011. 『10分でわかる思春期の恋バナ-クラスに1人はいるかもしれないセクシュアル・マイノリティ』.
- 河口和也. 2003. 『クィア・スタディーズ』 岩波書店.
- 君塚正臣. 2007. 「同性愛者に対する公共施設宿泊拒否-東京都青年の家事件」 高橋和之 (ほか編). 『別冊ジュリスト No.186 憲法判例百選1』 有斐閣:68-69.
- 小宮明彦. 2011. 「多様な性をめぐる (性) 教育に関する一考察」 『論叢クィア』 4:135-50.
- 佐藤 (佐久間) りか. 2007. 「ヘテロセクシュアリティの社会構築論 -<異性愛者>の作られ方-」 根村直美 (編著) 『揺らぐ性・変わる医療 ケアとセクシュアリティを読み直す』 明石出版:183-212.
- 富山一郎. 1998. 「赤い大地と夢の痕跡」 複数文化研究会 (編). 『<複数文化>のために -ポストコロニアリズムとクレオール性の現在-』 人文書院:117-129.

- 平野広朗. 2002. 「誰が誰を恥じるのか」 伏見憲明 (ほか著). 『「オカマ」は差別か-『週刊金曜日』の「差別表現」事件-』 ポット出版:114-8.
- 堀江有里. 2001. 「戦略としての<カミングアウト>-レズビアン/ゲイのアイデンティティ・ポリティクス」 『人権教育研究』 9:75-93.
- マリィ,クレア. 2007. 『発話者の言語ストラテジーとしてのネゴシエーション行為の研究』 ひつじ書房.
- 吉仲崇・星野慎二. 2012. 「かながわレインボーセンターSHIPの取り組み」 加藤慶・渡辺大輔 (編) 『セクシュアルマイノリティをめぐる学校教育と支援 -エンパワメントにつながるネットワークの構築に向けて-』 開成出版: 155-71.
- ラウレティス, テレサ・デ. 1998. 「クイアの起源-レズビアンとゲイの差異を語ること」 風間孝・ヴィンセント,キース・河口和也 (編). 『実践するセクシュアリティ』 動くゲイとレズビアンの会:66-78.

Takashi Yoshinaka is a student in the Doctoral Program in International Cultural Studies, Graduate School of Urban Social and Cultural Studies, Yokohama City University. Yoshinaka received a Master of Arts degree in International Cultural Studies from Yokohama City University (2008). Recent publications include "The narcissistic strategies of improving male bodies in men's magazines: The analysis of women who criticize narcissists, and men who ignore them" (2008), and "The intersection of sexual minorities and libraries: Through the activities of SHIP Rainbow Cabin" (2012). Yoshinaka's research interests include queer studies and men's studies, especially the analysis of the gendered bodies and identities.